

## ■ PC のさらなる国際化を目指して



睦好宏史\*

今年の1月に姪の結婚式に出席した。新郎はシンガポール人で式はシンガポールで行われた。話を聞くと、新郎の母はマレーシア出身で、姉の夫はオランダ人、披露宴で同席した叔父は香港で事業をしており、奥さんは韓国人、その娘は香港国籍で、その夫はアメリカ人である。このような話を物珍しそうに書く自分がすでに国際化から遅れた人間である。日本を一步出ればこのようなことは日常茶飯事であるといつてよい。ちなみに結婚式と披露宴は英語で行われ、時たま中国語がはさまれた。英語と中国語が分からない数少ない日本人出席者のために通訳が雇われていた。何やら日本企業が海外に出て採算がとれない実情を垣間見た思いであった。

昨今、大学の秋入学が世間を賑わかせているが、要するに大学のグローバルスタンダード化である。4月入学を実施する国は、日本、インドなど数カ国で、多くは10月入学を実施している。このことから、より多くの留学生を日本に迎え、日本からも無駄な期間なしに海外の大学へ留学させようとするものである。秋入学にしたからといって、日本の大学がすぐに国際化されるものではないが、一步前進といったところであろうか。このような日本の大学の国際化は今に始まったものではなく、すでにいくつかの大学あるいは学科で行われている。私が勤務する埼玉大学の環境社会基盤国際コース（土木系大学院）では、1992年に留学生特別コースを設置した。文部科学省やアジア開発銀行などから奨学金をだしてもらい、海外から優秀な留学生を受け入れて学位を授与するものである。入学は10月で講義、研究指導を英語で行うことが必須である。われわれのコースからすでに300名以上の留学生が大学院修士、博士課程を修了し、母国はもちろん、アメリカやオーストラリアなどの大学の教授になるものも出てきている。このように留学生を対象とした国際化

は着々と進みつつある。しかし、日本人大学院生が海外に留学する数はわずかであり、ましてや学部生に対する国際化はほとんどなされておらず、海外への留学もきわめて少ないのが現状である。秋入学の次は、大学のキャンパス内は、講義なども含めて、日本語と英語を公用語にすることが必要であると思われる。

2009年にACI（アメリカコンクリート工学協会）の年次大会で、日本人グループが書いた論文が賞を受賞したが、そのオリジナルの論文は日本語ではなく、英語で書かれたものであった。理由は至極簡単で、著者が属する企業の主な活躍場所は海外であり、日本語で書いても意味は無いということであった。このことは今後の論文の出版の在り方を示唆しているといつてもよい。

さて、PCの世界に目を移せば、国際化はまだまだ遅れているといつてもいいだろう。2008年に国際対応小委員会が設置された。それまではPC工学会（旧、PC技術協会）の英文ホームページはなく、海外からはPC工学会（旧、PC技術協会）を認知できないことなどが主な理由であった。さらにわが国のPC施工量が縮小傾向にあり、活躍の場を海外に求めるのは自然なことである。このようなことから、2007年に手始めにベトナムでベトナム政府機関のITST（Institute of Transport Science and Technology）とPC工学会（旧、PC技術協会）が共催して、PC橋のセミナーを開催した。セミナーは2009年、2011年と開催され盛況を博している。また、PC工学会とITST間で協定を締結することに同意している。このような海外活動が活発になり、近い将来、わが国のPC技術が世界を席卷する日が来ることを期待したい。

わが国のPCのさらなる発展を願って、ますますの国際化が進むことを祈念する次第である。

\* Hiroshi MUTSUYOSHI : 埼玉大学 副学長  
本協会理事